

# 雑誌『中央公論』の用語の経年調査について

## キーワード

『雑誌用語の変遷』，『中央公論』，用語，経年調査

以下の論考2編は、いずれも、雑誌『中央公論』の言語調査の成果の一端である。ここに至った経緯を簡略に記しておきたい。

### 1 ———

宮島達夫（1987）『雑誌用語の変遷』は、20世紀における雑誌用語の変遷を解明した研究の報告である。具体的には、雑誌『中央公論』を取り上げ、1906年から1976年までの10年ごとに各年延べ1万語の標本を抽出して、林大（1964）『分類語彙表』で同番号である語群の歴史的交替のほか、用語一般や表記・文体の変遷をも扱っている。『雑誌用語の変遷』をまとめたとき、宮島は国立国語研究所言語体系研究部第二研究室長であった。

この報告には、石井久雄（1990a）『『中央公論』1986年の用語』の追跡調査がある。宮島の研究は、概ね手作業で進められ、集計結果の処理をコンピュータで行った。石井は、1986年調査を初めからコンピュータ処理で行い、その過程で石井（1990b）も報告した。石井は、『雑誌用語の変遷』のまとめの段階で宮島の下に就き、後に第二研究室・第三研究室で1986年の用語について記した。石井は、また、1996年の標本の用意までをしていたが、後年、同志社大学に転ずる。

### 2 ———

ところで、橋本和佳は、橋本（2008）にまとめられる外来語の出現状況の研究を同志社大学大学院在学時に進めていて、『雑誌用語の変遷』の成果を参照し、そこに、石井が用意した標本によって1996年の調査を追加することを、2004年から2005年にかけて試みた。その際の調査単位の検討には、やはり大学院に在籍していた石田裕子・廣川雅子も加わっている。翌2006年には、橋本と入江さやかとによる補訂も行われた。

入江は、現代における音韻の出現状況の研究を大学院で進めていて、調査対象に中央公論も取り上げることとし、『雑誌用語の変遷』およびその延長上で2006年までの101年間延べ11万語分の標本のすべてをコンピュータ処理することを企画した。2007年には、2006年の標本抽出および本文のコンピュータ処理を、大学院在学の属圭珍とともに始め、直ちに大学院在学の陳智瑜・丸山健一郎および修士生の石田裕子・米澤昌子も加わった。このチームで、さらに、国立国語研究所情報資料部門資料整備グループに保管されている『雑誌用語の変遷』の標本について、複写の許可を得、2009年までにコンピュータ処理の準備を整えた。

### 3 ———

以上のように整えた資料によって言語分析を試みたのが、以下の諸論考である。中央公論の標本についての言語分析である、ということのみが共通する。『雑誌用語の変遷』の主たる目

的は用語の分析であるが、同じ資料に他の目的をもって対してもかまわないであろう。分析項目は、それぞれの関心で選んでいる。用語の分析もなく、それを中心とする全体的考察は、いずれ「雑誌用語の20世紀」といった形でまとめるつもりでいる。

資料の標本は、一年間に発行された中央公論12冊について、各ページが等面積の10部分から構成されるものとし、その部分いくつかを等間隔に抽出したものである。標本数は、延べ語数が1万になるように調整する。1906年から10年ごとに1916年・1926年・……・1996年・2006年の11年間にわたって、このように抽出したものが、資料の全体である。抽出比率は年ごとに異なって1/100～1/200程度であり、異なり語数は毎年4500近辺である。

なお、「語」は、ほぼ文節に相当する。見出し語では、助詞・助動詞および一部の接頭辞を捨象する。

#### 4 ———

コンピュータ処理用に整えた資料は、国立国語研究所に納入する。標本の本文に、語の句切りを入れてある。品詞・語種等のタグは添えていない。

\*

石井 久雄（1990a）『中央公論』1986年の用語。

国立国語研究所報告 101 研究報告集 11 pp.1-40。秀英出版。

—————（1990b）雑誌における語の長さ。計量国語学 17.4 pp.193-206。

橋本 和佳（2008）現代日本語における外来語増加の S-curve モデル——大正から平成までの社説の通時的調査を通して。博士（同志社大学）（国文学）学位論文。

林 大（1964）国立国語研究所資料集 6 分類語彙表。秀英出版。

宮島 達夫（1987）国立国語研究所報告 89 雑誌用語の変遷。秀英出版。

（文責） いしい ひさお  
石井 久雄

同志社大学文学部